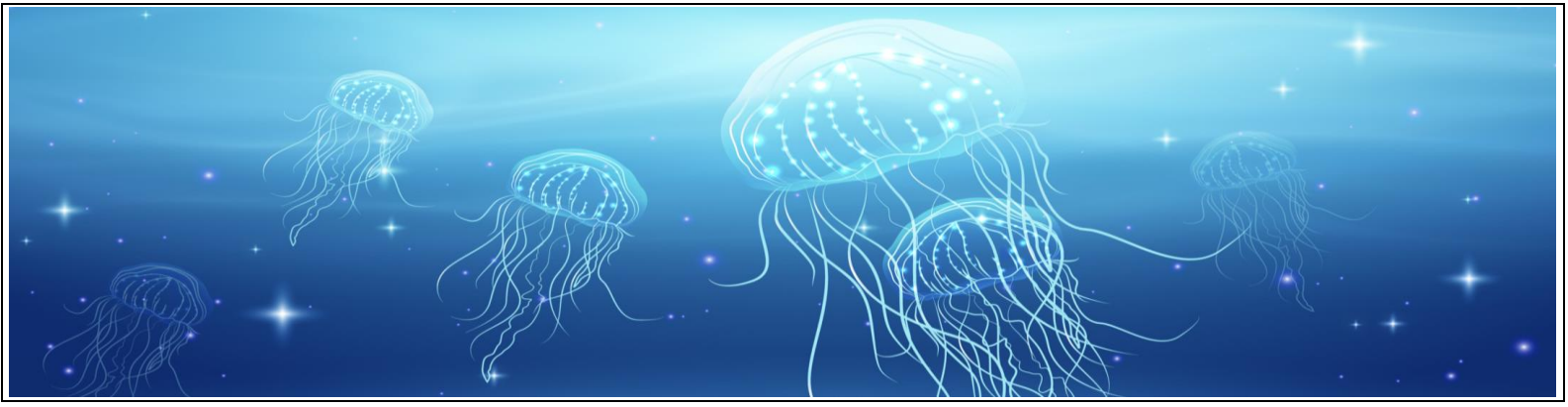


**Lesbian Motherhood in the U.S.**

米国のレズビアンの母親についての研究

**Interviewee**

**Dr. Ellen Lewin**

**Q. ご自身の研究のバックグラウンド、専門領域を教えてください。これまでに実施した研究についても教えてください。**

最も古い研究は、レズビアンの母親を対象としたもの。当時、レズビアンの母親は存在しないし、研究対象を見つけるのは不可能だと思われていたのだが、自分は 1978 年にサンフランシスコでこの研究を開始した。

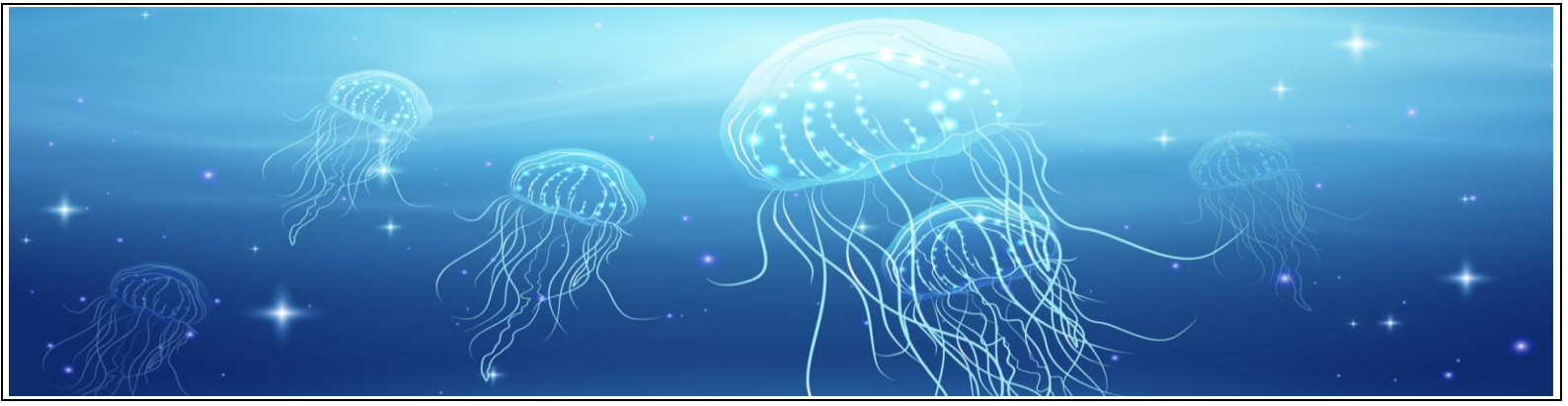
この研究では、異性愛者のシングルマザーと比較するグループを作った。レズビアンの母親のほとんどは、男性と結婚している間に子どもを産み、中には子どもを産むために男性と結婚した人もいた。彼女たちの多くは、元夫と敵対しており、それに対処していた。例えば、自分のセクシュアリティが原因で子どもの親権に関して法的な問題に直面している人もいた。そのため、自分が行ったインタビューの多くは、こうした法廷闘争に関連するものだった。この作品のきっかけとなったのは、1966 年から 67 年にかけて、父親が親権を求めて提訴し、上の子が母親に対して証言したという、非常に話題になったケース。この事件については本も出版され、後にテレビ映画にもなった。

その後、生殖補助医療やその他の方法で、自力で子どもを授かったレズビアンたちに出会うようになった。中には、友人から提供された精子を使った人もいた。まだ体外受精を受けられる人がいなかったので、すべて非公式なものだった。自分は、女性がなぜ母親になりたがるのか、母親であることがなぜそれほど重要なことなのかに興味を持った。これが、初期の研究の原動力となった。

自分がレズビアンの母親に関する本を完成させたのは、研究者としての雇用が不安定だった、1990 年代初頭のことだった。インタビューはコンピュータが一般的になる前に行われたので、すべて紙に書き写していた。2 万ページものタイプされたインタビューに目を通し、最終的にはコンピューターに入れなければならなかった。この本が出版される頃、レズビアンにとっての子育ての何がそんなに魅力があるのかにとても興味を持った。彼女たちは、母親であることから得られる道徳的価値、たとえば、誰かを第一に考えること、誰かの世話をすることについて話してくれた。また、子供を持たないレズビアン・コミュニティから疎外されるという話もあった。それでも、サンフランシスコ・ベイエリアのゲイ・コミュニティは、時とともに子どもに対して寛容になっていった。

また、同性婚が法的に認められるよりかなり前の 1990 年代にアメリカで行われた同性間の宣誓式(commitment ceremonies)についても研究している。同性同士の結婚式に出席して、これらのカップルとレズビアンの母親たちの間に、同じようなテーマがあることに気づいた。つまり、彼らがやっていることは革新的である一方で、それは「普通」「自然」であると語られていた。あるカップルは、自分たちの結婚式は完全に「クィア」だと言いながら、非常に伝統的な要素を取り入れたり、またはその逆もあった。

宣誓式に関する本を書く過程で、子供を持つゲイの男性に出会い、次のプロジェクトでは、この男性に焦点を当てた。彼らは、国際養子縁組や国内養子縁組、すでに家族にいる子供を引き取る、前妻の子供を育てる、卵子提供による代理出産など、さまざまな方法で家族を作っていた。ある意味では、伝統的な子育てを再現しているが、ある意味では、異性間のカップルと比較すると、かなり特殊だ。国際養子縁組は



「赤ちゃんを買うようなものだ」と言う人もいたが、そう批判するカップルが代理出産に 12 万ドルもかけるのは、非常に矛盾しているように思える。子供ができたことで、多くのゲイカップルは、より良い学校に通うため、あるいは子供が遊ぶための庭を得るために、ゲイがあまりいない地域に引っ越すなど、子供のために犠牲を払うようになった。そうすることで、ゲイ・コミュニティの枠を超えて、社会的なネットワークが広がっていく。

最近の著作は、“Filled with the Spirit”(魂に満たされて)というもの。これは、アフリカ系アメリカ人を中心としたゲイ／レズビアンの宗教連合である“The Fellowship of Affirming Ministries”という教会に焦点をあてたもの。ゲイの父親について研究しているときに出会った父親の一人は、神学生で、自分が行っていた礼拝に彼を招待し続けていた。その教会はペンテコステ派で、参列者は礼拝中に異言で話したり、床に倒れたりなどしていた。

その本が出た後に退職し、今は研究を行っていない。この 40 年間の LGBTQ 家族の変化と発展の一部を図式化したと思っている。今、アメリカでは同性婚が認められ、最高裁の判決ではこうした家族の子どもたちが最前線に立ち、その変化は非常に大きい。

**Q. レズビアンの女性、レズビアンのカップルにとって、親になることはどのような意味を持ちますか? 母親になることは、自然なこと、ごくあたりまえのことですか? ゲイカップルの場合はどうですか?**

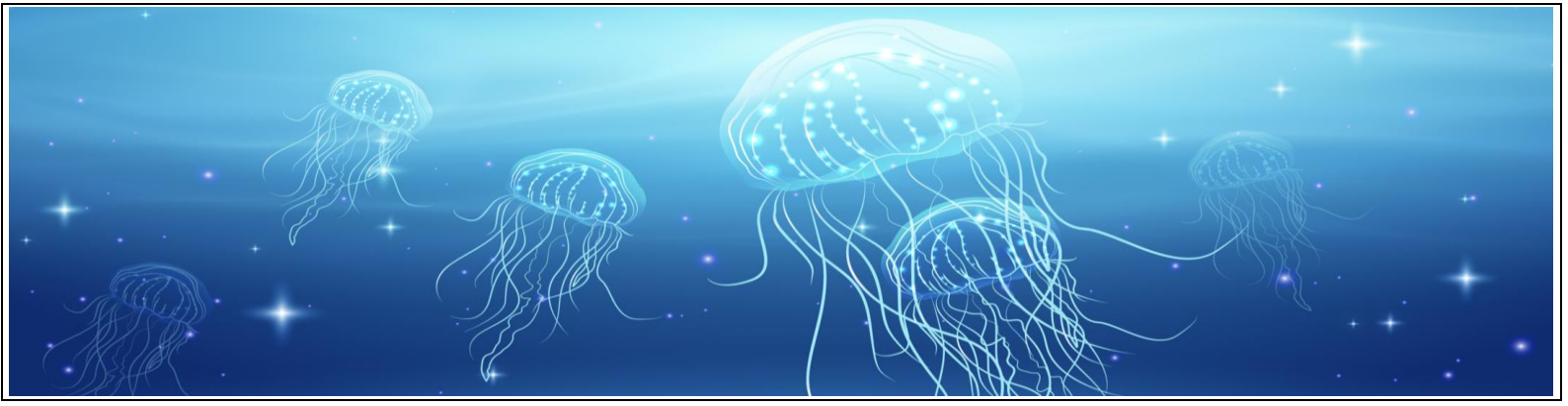
多くのレズビアンは、子供を持つことを道徳的な聖戦、恩返し、良い人になること、利己的でない方法としてとらえている。子供を持つことで、ある種の道徳的資源にアクセスできる。犠牲とそれによる苦難に関する道徳的主張をするために使われる。これはおそらくアメリカ全土で共有されている考え方。具体的には、子供を第一に考える、子供に経済的な資源を割り当てる、など。

同じことが、ゲイ男性にも別の形で当てはまる。インタビューした人の多くは、グアテマラなどの国から養子を迎え、その子を「救出」するのと同じようにとらえていた。また、障害児を養子として迎え入れた人もいた。このような決断には、確かに道徳的な側面があり、大きな犠牲を払っている。自分が話したゲイの男性は、ゲイカルチャーについて、「もうそれ(バーに行って酒を飲む、オペラのシーズンチケットを持つ、など)は自分にはできない、金がかかりすぎるから」と軽蔑的に話すことが多かった。ゲイカルチャーの活動を続けるにはベビーシッターが必要で、子どもの大学進学のための貯金の方がそれとは比べものにならないほど重要だと考えているようだった。

全体として、ゲイやレズビアンの親たちの子育ての価値観は、より広い文化が抱く価値観と非常によく似ている。それは、大人の地位に到達した証であり、犠牲を払い、何が重要かを見極めることだ。

**Q. ゲイカップルとレズビアンカップルが協力して家族を作るようなことは昔はよく行われていたが、今はあまり行われていませんか? なぜですか?**

この方法は生殖補助医療を使うよりずっと安いのだが、法律的には人々を非常に弱くする。精子ドナーが将来的に親権者になろうとする可能性があるため、多くの点で精子ドナーを知ることは良いことではない。ドナーを使うには費用がかかるが、匿名を選択する方がはるかに安全。ドナーを選ぶのは、オンラインショッピングのようなもので、利用可能な選択肢を見て、実の父親にどんな属性を求めるかを決める。同じ地域に住み、同じ精子バンクを利用するレズビアンの場合、お互いに出会って、自分の子供が同じ父親であることを発見する



可能性がある。これは一種の拡大家族を作ることになる。

精子提供に関する不思議な話も多い。自分の大学院生の一人は、レズビアンのパートナーとの間に精子ドナーを使って子供をもうけた。その子は 10 代でドナーを探し、実の母親はドナーと恋に落ち、レズビアンの関係から離れることになった。私たちの文化では、遺伝子の結びつきが明らかに重要なのだ。

**Q. 精子ドナーを利用したレズビアンにとって、遺伝的父親はどのような存在ですか? 子供にどのように教えていますか?**

通常、彼らはこの人物が自分たちの家族の中で役割を持つことを望んでいない。家族ぐるみで付き合いのあるドナーを使うケースもあり、子どもは常に実の父親が誰であるかを知っていることになる。このような場合、ドナーは教育費を負担したり、親のような役割を果たしたりして、大家族のような形で運営される。通常、このようなことは非常に危険なこと。夫婦がどうするかは、その人次第。

ゲイの男性の場合、役割分担（卵子提供者、代理出産者)を込み入ったものにした上で、その女性たちを招き入れることを選択する人もいる。また、子供には母親がいないことを伝えるという選択をする人もいる。これは、子供にとって意味を理解するのが難しいことだ。これは、養子の子に、実の親が誰であるかという話をでっち上げるのに似ている。養子縁組の場合、実の母親が連絡を取りたがらないこともある。代理出産の場合、代理出産者と卵子ドナーは、依頼者との関係から利益を得たいと願っているかもしれない。とても複雑だ。

最近では、生殖補助医療を使った家族形成について、より一般的に知られるようになってきた。それは、クィアである人もそうでない人でも同じこと。

**Q. 同性カップルにとって、家族を作ることは、一人前の市民として認められたいという動機がありますか? 子供を持つことで、二人の関係が親密性を増し、永続的なものになると期待されていますか?**

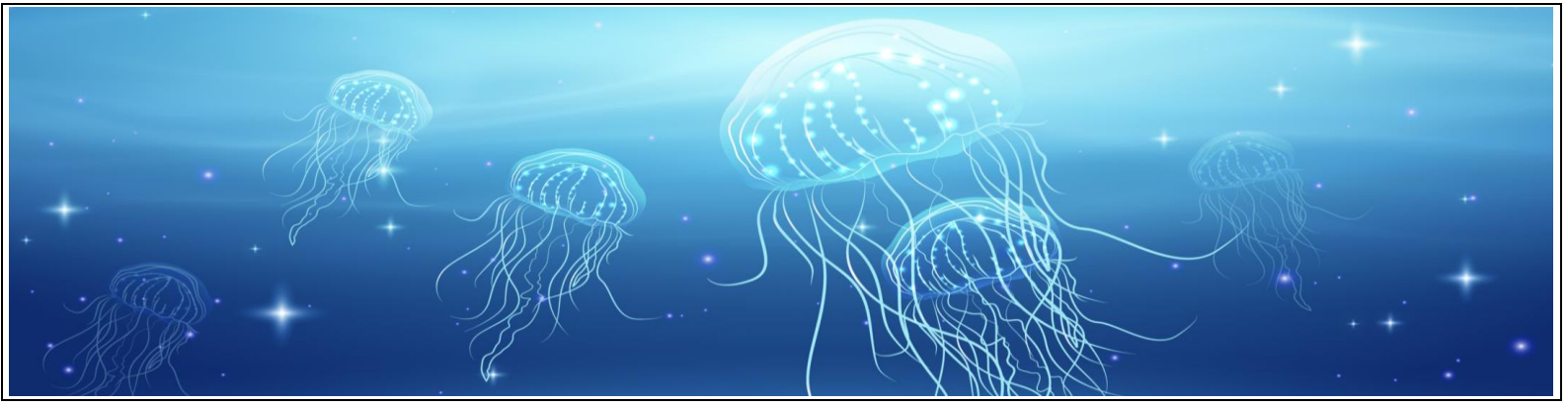
子どもを持つことで、コミュニティの内部に入ることができる--それは、「完全な人間」になるための手段であり、同性愛者であることを補ってくれるかもしれない。核家族ヘテロモデルを模倣しようとする人もいれば、そのシステムを破壊したいという人もいる。伝統的な核家族生活の多くの側面は、非常に楽しくて満足できるものなので、そこに行き着くまで、そうしたものを望んでいたことに気づかないカップルもいるかもしれない。同性愛者が異性愛者と同じようになりたいという動機を持っていたとしても、社会の誰もそれを期待していない。

昔は、一緒に家族を作ることで、二人の関係の永続性を世間に示そうとしたのかもしれない。しかし、同性婚が合法化される前は、実の親でない者には何の権利もなかった。異性カップルと同じように、結婚と離婚によって、これをうまく管理できるようになったのは、最近のことだ。

最近、米国で中絶法が改正されたのに続き、次は同性婚が取り上げられるのではないかという議論が出ている。LGBTQ コミュニティは、このことを非常に懸念している。

**Q. 相互 IVF(reciprocal IVF)はどのくらい浸透していますか? これは、レズビアンカップルにとって魅力的な方法ですか?**

自分の研究で reciprocal IVF を見たことはないが、実際に遭遇したことはある。これは、二人の女性が、自分たちが生物学的な母親であると言える方法であり、生物学的な父親が背景に退くことを意味する。そのプロセスを生物学的に表現すると、まるで一人の女性がもう一人を妊娠させたかのようだ。



相互 IVF は難しく、体外受精を伴うので費用がかかる。卵子を採取し、ドナーの精子と受精させる前に、卵子を提供する女性はホルモンの注射をしなければならない。その後、受精卵を妊娠する女性に挿入する。これは、健康保険で完全にカバーされない贅沢なオプションだ。

この方法で子供を持つことは、夫婦の間の親密度を高めるかもしれない。もし金銭的余裕があるならば、家族を作るのによい方法だといえる。家族がより「自然」に見えるようになるから。

20 年前にインタビューしたゲイカップルは、それぞれ姉妹がいて、彼女たちは兄弟のパートナーの男性に卵子を提供した。その結果、そのカップルの 2 人の子どもはいとこ同士になった。卵子は無料だったが、代理出産にお金がかかったので、かなり高くついた。その結果、生物学的に非常に結びつきの強い家族になった。

もうひとつ、体外受精は多胎の確率が高いということがある。以前、三つ子の子供を持つ独身のゲイ男性にインタビューしたことがある。

**Q. その他**

自分は 76 歳で、もう研究活動をしていない。現在、アイオワシティにあるエマ・ゴールドマン・クリニックというフェミニストによるリプロダクティブヘルス・クリニックの理事を務めている。このクリニックは、Roe v Wade 最高裁判決から間もなくして開業し、2023 年には 50 周年を迎える。理事会はまもなく、中絶手術を行う権利を失ったときにどうするかを決める必要があるだろう（おそらく今後 1 年半のうちに）。

**Dr. Ellen Lewin** Link

1967 年に、シカゴ大学で言語学学士号、1968 年には、スタンフォード大学で人類学の修士号を取得。1975 年には、同大学で人類学の博士号を取得。

1999 年からアイオア大学の女性学・人類学の教授となり、フェミニスト・レズビアン/ゲイ・医療の人類学を中心に研究。

現在は退職し、アイオワシティにあるエマ・ゴールドマン・クリニックというフェミニストによるクリニックの理事を務めている。

2005. Ellen Lewin, ed., Feminist Anthropology: A Reader, Blackwell Publishers.

2002. (co-editor, with William Leap) Out in Theory: The Emergence of Lesbian and Gay Anthropology (U of Illinois Press)

1998. Recognizing Ourselves: Lesbian and Gay Ceremonies of Commitment (Columbia U Press)

1996. (editor) Inventing Lesbian Cultures in America (Beacon Press)

1996. (co-editor, with William Leap) Out in the Field: Reflections of Lesbian and Gay Anthropologists (U of Illinois Press)

1993. Lesbian Mothers: Accounts of Gender in American Culture (Cornell U Press

(2022 年 7 月)